四国ディスカバリー

～人を育て、地域を育てる情熱企業～

高松自動車道「さぬき豊中ＩＣ」に程近い工業団地に突如現れる赤いロゴマーク。自然と気持ちが高まります！

今回の四国ディスカバリーは、創業 100 年を超える老舗モノづくり企業、建設機械の部品製造や産業用バッテリーの製造販売を手掛けている**「株式会社イナダ」**をご紹介します。

同社の常務取締役、新規事業企画室長を務める稲田伊知郎さんにお話を伺いました。とにかく〝話が面白い〟伊知郎さんは、ＦＭ香川のＤＪもやってます。気になるその話も後程、ご紹介します。

企業・団体情報

名　称	株式会社イナダ
所在地	香川県三豊市豊中町笠田笠岡 3915 番地 3
創　業	1918 年（大正 7 年）
代表者	代表取締役社長　稲田耕一
従業員	60 名
資本金	2,000 万円
Ｈ　Ｐ	http://www.inadainc.co.jp/

●とことん地域に愛されている企業。地域に長く愛される秘訣は？

当社は農業機械からはじまりました。「少しでも地域の農家の人たちを楽にさせてあげたい」という創業の精神は、時代が変わっても変わることはありません。農業機械は地域色が強く、土壌や作物の性質によって仕様を変えないと使い物になりません。そこから常に「顧客の声を聞く」「地域のニーズに応える」企業精神が培われたのだと思います。これからも地域の皆様に必要とされる「三豊のイナダ」であり続けたいと思います。

稲田伊知郎　常務取締役
インタビュー中も終始スマイル

●やっぱりイメージカラーは「情熱の赤」

1989（平成元）年、「稲田農機株式会社」から「株式会社イナダ」に社名変更した時、当時の社長（現在の会長で、伊知郎さんの実父）がイメージカラーを「赤」に決定しました。当社の農業機械は、田畑の中でも目立つという理由から赤色に塗装したものが多かったので、「稲田といえば赤やろ！」という地域の皆様の声で「赤」に決まったそうです。おかげでイナダカラーは地域にしっかり定着しています。（赤の持つ情熱的な印象が、情熱的な社風（伊知郎さんのキャラ!?）ともぴったりマッチしていますね！）

●まさに地域ブランド戦略のパイオニア

当社は先々代の頃から、三豊の農海産物やうどんを海外に輸出していました。タイやカンボジアで三豊地域の物産展を開催したのも「地元の農家の売上に貢献したい」との思いからです。また、海外から研修生や留学生を多く受け入れてきました。当社では海外からの研修生や留学生を「安価な労働力」扱いせず、日本の文化や当社の技術を徹底的に教え込みました。その証拠に、研修生や留学生の多くは帰国後、当社の現地法人で活躍しています。地域をまるごと外に売り込む、まさに〝地域商社的〟な企業であると自負しています。

●巻き込む力は親譲り

取材の記念に集合写真をパチリ
この日も地元の方を巻き込んで

私は東京のメーカー勤務を経て家業に入りましたが、実父である会長が持つ「豊富な人脈」や「行動力」にはいつも驚かされます。会長の型破りなとっておきエピソードは、ついに昨年、洋楽好きが高じてドラムの神様スティーヴ・カッド（エリック・クラプトンのツアー・バンドでも演奏するなど世界的ドラマー）の来日公演（しかも三豊市文化会館!!）を実現してしまいました。最近では、特に地域の課題解決に取り組む若手に目をかけ、半ば強引に海外での商談や視察に同伴させるなど、若手のチャレンジ精神を後押ししています。

私のエピソードといえば、実は月１回、ＦＭ香川のＤＪもやっています。会長がやっていたラジオ番組（二度ビックリ!!）をそのまま引き継ぎました。会長は洋楽を流していましたが、私は地元の"面白い方"をゲストに呼んでトーク番組をやらせてもらっています。「地域を盛り上げたい」と思って始めたことですが、自分も楽しみながらやっています。地域のための協働は"人を巻き込む"ことから始まるのかもしれませんね。

●いつもやさしい、どこか新しい。「地域のよろず相談所」

工場内を丁寧にご案内いただきました
整理整頓された工場にビックリ!!

当社は、顧客の「こんなモノを作ってほしい」に全力で応える多品種少量生産を行っています。月 5,000 種類もの部品を製造しており、うち製造ロット 5 個以内の少量受注が半分以上を占めています。3 年前には地元の神社に頼まれて、ちょうさ（太鼓台）の鉄製台車を特注で作りました。意外と評判が良くて、他の神社からも依頼が続いています。"地域のため"に儲け度外視で作ったのですが、祭りは全国各地にあるので、これこそビジネスチャンスかもしれませんね(笑)。

これからも工場見学や海外研修生、地元の小学校での講演なども積極的に受け入れ、老若男女、国籍問わずあらゆる相談が舞い込んでくる「地域のよろず相談所」と言われるイナダでありたいと思います。

＜取材後記＞

○外で磨かれた視点と内で育まれた情熱が支える老舗企業。男社会な業界「製造業」の取材に内心ドキドキでしたが、一瞬でファンになりました。私も地域の職に就く端くれとして、地域の未来を担う企業や人を知り、知見を広げることから始めたいと思います。（局　総務課　林恭子）

〇ビジネスのための新規事業開拓というよりも、とにかく新しいことや興味のあることを楽しんでいるような伊知郎さん。繰り広げられる面白エピソードの数々…紙面には書ききれず残念です！会社の枠を超えて人を巻き込み、様々なつながりを拡げていく姿にパワーをいただいた一日でした。（局　財務広報相談室　曽根あい）

掲載している情報は、令和元年 10 月時点のものです。